



お囃子が
聞こえる



川崎ゆきお

「人には一人一人に物語がある」

と、物語の好きな人が語り出した。立花はまたかと思いながら聞いている。

「物語は作られる。編集される、そのままでは物語とは言えない。編集してこそ面白い物語となる」

立花は最近この手の話をよく聞く。以前からそういう風潮はあったのだが、今は食べ飽きた。聞き飽きた。

「同じ体験でも、切り口により物語性が違ってくる。ジャンルそのものもな。どういう人生を歩んできたのかは今ここで分かる。それは今このときの切り取り方、とらえ方、編集の仕方により違ってくるのだ。だから、この教室では編集技術を大いに学んで欲しい。あなたの過去はそれで塗り替えられる」

新味がないと立花はガッカリした。逆に安心だ。この程度のことを大事そうに語るのだから。

「物語とは流れだ。自分の流れを探しなさい。いや、思い出しなさい」

「先生」

「質問はあとにして下さい。流れがあるので」

「はい」

一人の生徒は、質問をやめた。

話の流れは先生にあり、生徒にはない。だから、この教室の物語は先生の物語となっている。立花がいつも思うのはそれなのだ。自分の物語にこだわるのはいいのだが、物語の取り合いになる。

「自分の過去やってきたことを書き出しなさい。それらは細切れのエピソードです。そこに脈略を見付けることから始めましょう。これを文脈といい、コンチキチンです」

やったと、立花は思った。生徒全員も同じことを思った。知らないのは、このコンチキチンの先生だけだ。それに気付かず、先生の話は続く。これこそ、物語の妙ではないか。

「先生、祇園祭の物語ですか？ またはキツネの話ですか」

「何がかね」

「コンチキチンと、今、お囃子が」

先生は、まだ気付かない。

これで、この場の物語は先生から生徒達のものになった。

了